

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成 27 年産水稻の作付面積（子実用）は 17 万 700ha で、前年産に比べて 7,500ha（対前年産比 4%）減少し、うち、主食用作付見込面積は 16 万 6,300ha で、前年産に比べ 7,400ha（同 4%）減少した。品種毎の作付面積を見ると、「ヒノヒカリ」及び「コシヒカリ」が九州全体の作付面積の 60%以上を占める一方、福岡では「夢つくし」、「元気つくし」の合計で 12.1%、佐賀では「夢しづく」、「さがびより」の合計で 6.3%、熊本では「森のくまさん」、「くまさんの力」の合計で 3.5%など各県の独自品種が作付けされている。また、「にこまる」、「あきほなみ」、「つや姫」、「おてんとそだち」等の高温耐性品種が県毎に作付けされている。

2. 作柄の概況

九州における平成 27 年産水稻の作柄は、低温・日照不足による生育の遅れ、いもち病及び台風第 15 号の通過に伴うもみずれ等の被害により、10 a 当たり収量は平年を下回る 484kg（前年産並み）、収穫量（子実用）は 82 万 6,800t となった。また、主食用作付面積に 10 a 当たり収量を乗じた収穫量（主食用）は、80 万 6,100t（前年産に比べ 3 万 1,200 t 減少）となった。県別の作況指数では、福岡「95」、佐賀「99」、長崎「100」、熊本「97」、大分「95」、宮崎「93」、鹿児島「95」、沖縄「94」であった。

3. 生育の概況

1) 早期栽培水稻（主産県：宮崎・鹿児島）

作柄は、宮崎が 10 a 当たり収量 411kg（前年産に比べ 77kg 減少）、鹿児島が同 396kg（同 59kg 減少）となった。これは、田植期以降の気象が低温・日照不足で経過したため、全もみ数が少なかったことと、登熟についても登熟期が低温・日照不足となり、特に粒の充実が不足し「不良」となったためである。

2) 普通栽培水稻

全もみ数は、低温・日照不足の影響により九州各県ともに穂数が「少ない」ないし「やや少ない」となったが、補償作用により 1 穂当たりもみ数が「多い」ないし「やや多い」となったことから、福岡、佐賀、大分及び鹿児島は「やや少ない」となり、長崎、熊本及び宮崎は「平年並み」となった。登熟は、1 穂当たりもみ数が平年より「多い」ないし「やや多い」となり、台風第 15 号のもみずれ・葉ずれ等の影響があったものの、9 月中旬以降、日照時間及び気温日較差が平年を上回るなど、おおむね天候に恵まれ、晩生品種等を中心に登熟が回復したため、鹿児島は「やや良」、佐賀及び長崎は「平年並み」、その他の九州各県は「やや不良」となった。このことから、10 a 当たり収量は佐賀、長崎で平年並みとなり、それぞれ 513kg（作柄の悪かった前年産に比べ 33kg 増加）、479kg（同 16kg 増加）、その他の九州各県は平年を下回り、福岡は 480kg（同 2kg 増加）、熊本は 500kg（前年産並み）、大分は 478kg

(同 11kg 減少)、宮崎は 501kg (同 16kg 増加) 鹿児島は 476kg (同 13kg 増加) となった。

4. 被害の概況

早期栽培では、気象被害として生育期間を通しての低温・日照不足の影響による分けつの抑制及び登熟不良、病害では、いもち病及び紋枯病、虫害等ではスクミリンゴガイ及びカメムシの発生が見受けられ、平年に比べ「多い」となった。

普通栽培では、気象被害として日照不足による分けつの抑制及び台風第 15 号によるもみずれ等がみられた。病害としては、中山間地域を中心にいもち病が平年に比べてやや多くなった。虫害等ではカメムシは平年並みの発生、トビイロウンカについては平年より少ない発生となった。総体的に被害は「やや多い」ないし「平年並み」となった。